

Title	R. W. フォーゲル=S. L. エンガマン著 田口芳弘・榊原胖夫・渋谷昭彦訳 苦難のとき： アメリカ・ニグロ奴隷制の経済学
Sub Title	R. W. Fogel and S. L. Engerman, Time on the cross
Author	西川, 俊作
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1981
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.74, No.6 (1981. 12) ,p.664(104)- 667(107)
JaLC DOI	10.14991/001.19811201-0104
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19811201-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

R. W. フォーゲル=S. L. エンガマン 著
 田口芳弘・榊原胖夫・渋谷昭彦 訳

『苦難のとき』

アメリカ・ニグロ奴隷制の経済学』

（創文社，1981年刊，xii+495頁，8,000円）

1

コンラッド=マイヤース〔1〕以来、本書に至るまで、奴隷制の経済学は「15年をこえる」歴史をもっている。そして研究はいまも続き、拡大中なのであるが、その「完成を待たず」して、「研究結果の累積を公けにすること」、それもとくに「一般読者向けの本」をまとめることが（引用は日本語版への序による）、『苦難のとき』の眼目である。そのため、高度に専門的な論述はすべて「証拠と方法」と題する第2巻に収められ、第1巻「アメリカ・ニグロ奴隷制の経済学」では最少限の図表を掲げるにとどめて、それらの含意や解説に力を注ぐ、という工夫がなされている。

二人の著者が総計500ページ余のこの書物で力説していることは、第1巻（邦訳では第1部）エピローグからの次の引用文によく尽くされている、とおもわれる。すなわち、

「われわれが奴隷制の経済学の伝統的解釈を攻撃してきたのは、この消滅してしまった制度を復活させるためではなく、黒人の歴史の誤解を正すため〔で〕——アメリカの黒人は、アメリカという土壌の上で、彼らの最初の250年のあいだ、文化もなく、業績もなく、発展もなかった、という見解を打破するためである。われわれが示そうとしてきたのは、黒人史のこの誤った描写は、もともと奴隷制の批判者と擁護者とのあいだの論争の結果であり、その論争は、黒人が白人より劣っているという人種差別的な前提にもとづいていた、ということである。南部の歴史が、北部の人によって書かれた場合も、南部人の手になった場合も、この前提は、ほとんどの歴史家によって、南北戦争の時期から第二次世界大戦の前夜にいたるまで、一貫して継承されてきたのである」（傍点は西川，p. 195）

個々には色白から浅黒まで、日本人の肌色にも相当なばらつきがあるにもかかわらず、われわれは同一種

族、単一民族から成り立っているという、学問的には不確かではあるが、しかし牢固とした信念の成立している日本社会では、アメリカにおける黒人問題の根深い問題性はなかなか分かりにくい。したがって、人種差別感の横行、人種差別的な前提の支配を糾弾するフォーゲル=エンガマンの主張も、なにをいませらという受け取り方になりがちなものだ。だが、引用文中に傍点をつけた通り、北部人のみならず南部人も、また奴隷制の擁護者よりはむしろ批判者が、このような前提の虜になっているところに、問題の難しさがある。合衆国史における奴隷制の問題性と同程度の重みをもつ課題を、もしわが国の近代史上に求めるなら、それは天皇制しかないであろう、といえ、日本人にも奴隷制問題のややこしさが、少しは実感をもって迫ってくるかもしれない。

このアナロジーの当否はさておき、通説によると奴隷制はまったく採算がわるく、経済(学)的に見ても消滅すべき制度であったし、したがってまた、奴隷制は合衆国、なにかんずく南部の経済成長を妨げるものだという「経済的告発」を受けたのである。（なお通説のレビューは本書の付論Cに収められている）しかし、コンラッド=マイヤース〔1〕、エバンス〔5〕、安場〔11〕の推定計算によれば、奴隷制の収益率は他の事業に優るとも劣るものではなく、南北戦争まえでも奴隷制が自ら衰微する兆候はほとんど認められなかった。つまり、経済的にはそれは十分存続可能だったのである。フォーゲル=エンガマン〔6〕はさらに奴隷農場が北部農場および自由農場にくらべて効率的であることを示したが、『苦難のとき』ではその効率の源泉が組労働システムにあることを、あきらかにする努力を展開している。

経済学上のトピックスとしては、1840、60年における各州の人口1人あたり所得（イスターリン〔4〕による）推計値によって、南部諸州の水準が国際的に見ても高いものであったこと、またその成長率も北部にくらべて遜色のないものであったことを示している。奴隷市場の実態分析も、また経済学的トピックスの一つであるが、そこでは、売買よりもむしろ賃貸借が普通であったという事実が報告されている。これはたとえば、夫婦や親子の分売といった、まるで生木を割くような無慈悲な奴隷売買という、いいふるされた事例が稀れであり、賃貸された奴隷は借主によって大方の想像とは逆に衣食住、医療、労働条件の上で（契約条項に従い）ずっと適切な待遇を受けていた、ということ

を意味している。こうして事実と照らして見ると、奴隷制にかんする諸々のエピソード、テーゼといったものは、おおむねのところは神話であり、誤った思いこみでしかなく、雇主による女奴隷の性的搾取とか、食うや食わずの強制労働という挿話またしかりであった。

以上のような反通説的、ないしは通説破壊的結論は、フォーゲルとエンガマン、ならびにかれらの協力者たち、ひと呼んでフォーゲル＝エンガマン・カンパニーが各地の文書館、図書館、協会等々から集めた膨大な取引記録、経営帳簿、および統計調査原票の集計、解析に根拠を置いている。既存の奴隷制にかんする議論は、農場経営者の回想・手記、旅行記や観察者探訪者の報告など、概して断片的で不確かな記録やデータにもとづくものであった。新しい奴隷制の経済学はそれに対し、より組織的なデータ収集と、より進んだ計量（経済学）的分析によって、通説にもとり通説を打ち破る結果と知見を導き出したのである。そして実際、奴隷制の経済学はクリオメトリクス（あるいはまた計量経済史、さらにはまた新しい経済史ともいわれる）が孤々の声をあげたところであり、そのごも引き続いてクリオメトリシャンの主戦場の一つになっているのである。

したがって、フォーゲル＝エンガマンがクリオメトリクスの旗手であることは、まぎれもない事実である。だが、そうであるからといって、本書をただクリオメトリック革命の書物として評価するのは適切ではないであろう。これは私の思いなしたのかもしれないが、訳者あとがきにもそのような嫌いが感じられる。あるいは訳書の読者に——私も含めて日本の読者の大部分は（上述の通り）合衆国における黒人問題の重みや、伝統的な奴隷制解釈について十分な知識、実感をもっていないので、本書の意義を的確に評価できぬかもしれないから——むしろ方法的斬新さの面から本書の値打ちというものを分からせようという配慮、戦術なのだ、と考えられなくもない。しかし、2人の著者はあきらかに、ここでは「反奴隷制十字軍」の戦士たらんと意図しているのであり、まさにそのようなコンテキストで本書がアメリカの読書界で大層な評判になったことは訳者のいう通りであるから、方法的革新などあまり強調しないほうが良さそうである。それはかえって数量的方法への反感を招きかねない。

2

原著刊行の翌年（1975年）、ハーバート・ガットマン

は *Journal of Negro History* における長文の批評論文を発展させ、みずからのアフロ・アメリカン家族の研究成果を盛り込んで、*Slavery and the Numbers Game: A Critique of Time on the Cross* [9] を上梓した。またポール・デイビッド等の批判論文集 *Reckoning with Slavery: A Critical Study in the Quantitative History of American Negro Slavery* [2] も刊行された。そこで口がさない論者は「出版後2年たらずして、この本『苦難のとき』はすでに検死解剖を受けつつある」と評した由である。しかし、と訳者はいう、「それは“奴隷制研究の新しい時代と国民的伝統の改訂へのなんらかの探求のはじまりを印した”彼らのイノベーションの価値をそこなうものでは決してない」と。（“……”内は誰の言かを私は審らかにできないのだが、訳者はこの辺りアメリカでの論評を生々しく伝えようとする余り、ひとの言葉であとがきを飾りすぎてはいないだろうか）

そして訳者は以下(pp. 462-466にわたって) *Reckoning with Slavery* 所収の諸論文、ならびに1977, 79年、および1980年にかけて *American Economic Review* 誌で、フォーゲル＝エンガマンと、その批判者であるデイビッド＝テミン、ギャビン・ライトなどのクリオメトリシャンとの論争（[3], [7], [8], [10]など）を紹介している。だが私見によれば、これらの論争はクリオメトリシャン相互間の（あえていうなら）切磋琢磨の討議であり、新しい奴隷制の経済学の方角づけに逆らう批判ではない。フォーゲル＝エンガマン第一のねらいは「一般読者」の啓蒙であったが、第二には「研究の完成」のためにクリオメトリシャンをはじめとして、ヒストリアン、エコノミストの批判を喚起するところにあつたのであるから、徹底的な批判はむしろ望むところなのであり、これは公開討論にたけたアメリカ学界のやり口というものであろう。

ところが、もっぱら日本的な感覚によって *AER* 誌上の討論を読むと、双方、白熱の討論であって、確かに「ポピュラ・プレスにおける賞讃の洪水」（[3]）は見られたが、学界ではどうも徹底的に批判されているようだ、という受けとめ方になりかねない。したがって訳者は、上記の口がさない論評などはそっこのけにしておいても良かったのであり、またクリオメトリシャンの同士討（？）について多くをいう必要もなかったのではないか。代りに、むしろ奴隷制の経済学の意義について、日本の読者のために解説の方を取られたなら、いっそう有益であつたらう、という気がする。

訳書に筆が及んだついでに、原著1, 2巻を訳書ではそれぞれⅠ, Ⅱ部とし、合本にしたという点につき、私なりの意見を述べるならば、これはやはり分冊のほうが便利ではなかったか。合本にする以上は、第Ⅰ部に第Ⅱ部(とくに付論B)の対応箇所を注記するという処置が必要であった。原著にはそれがなく、1→2の参照ができぬという不便さがあることは本書の欠陥の一つなのであるが、2巻本であれば第2巻を傍らに開いて、第1巻を読んでゆくことができる。だが合本になるとそれはまったく不可能であり、2→1の参照ですらいっそう手間がかかる。

私は訳者からこの高価な訳本を恵与されたものであり、なんらのお返しもせぬままに、いろいろ勝手にいうのは心苦しいけれども、原著の価格は第1巻\$8.95、第2巻\$12.50、計\$21.45である。それに対し訳書の価格が割高となるのは、印刷部数の相違によるものであって致し方ないところであるが、もし2巻本とすれば半額以下で日本の読者は少なくとも第1巻を手に入れることができたであろう。書物の価格弾力性はゼロでない以上、そのほうがより多くの読者を持ちえたはずである。むしろそのとき第2巻はより少なくしか売れぬ、という可能性も高い。けれども、「一般読者向けの本」という著者の意向を汲めば、極端な話、第2巻の邦訳は割愛するののも一つの選択であったろう、とおもう次第である。

とはいえ、以上は本の経済学にかかわる小事にすぎず、第1巻にとどまらず第2巻をも訳出された訳者3人の労苦をなんら眨しめるものではない。訳文、訳語についてみれば、ごくわずかの不統一訳、誤字、疑問訳を見出すのみで、全体によくこなれているという印象があり、奴隷制関連の用語等につき教えられるところが多かったことを、述べておかねばならない。

3

最後に残された紙数を使って、少々突飛な読後の感想を記しておきたい。それは一言でいうなら、日本の経営と勤労のシステムは奴隷制によく似ている、というものである。

奴隷農場の(他産業に劣らぬ)高収益率と、奴隷の待遇(たとえば食事、住居、労働条件)の良好さの平行関係にふれて、著者達はこういっている。「家父長主義は、本来的に資本主義的企業に反するものではない。また、それは必然的に利潤極大化にたいする障壁となるわけ

ではない」(p. 55)。その好例はIBMでありイーストマン=コダックだ、というのである。しかしこの両社とも、19世紀の奴隷農場と比較するには、少し眩しすぎるくらいに近代的であり巨大すぎる。「日本の工場」(アベグレン)のほうが、いっそう適切ではないか。

この感想は、近頃評判の高い、和製のQCサークルだの、あるいは組長伍長中心の現場編成だのが奴隷農場における組労働のシステムと存外似通っているという印象によって、強められる、興味深いことに、組労働システムの効率性は「苦難のとき」以降の論争において、経済理論、なかんずく新古典派のそれではうまく説明がしにくいので、論議的の一つになっているのである。フォーゲル=エンガマンは、(南部の)奴隷、自由農場、および北部農場の相対的効率をいわゆる全要素生産性で測っているのであるが、基本とするコブ=ダグラス型生産関数はすべてのタイプの農場に共通なものなので(p. 327)、組労働の効果は結局のところ規模の経済性としてしか把握することができない。上記のタイプ別に、それぞれ異なった生産関数を測定したら、各要素のべき係数はかなり異なったものとなりはしないか。

そしてまた、そのほうが、作物構成その他の違いによる開きを奴隷制の効率とみなしているといった批判(たとえば[2], [10])をまぬかれるであろうし、これらに対する反批判でかれらが述べている点([8], Figs. 2 & 3)にも適しているようである。

さらに一歩進んで、パターンリズムと高収益との関連づけについて、人的投資理論や、もっとダイナミックな企業モデル(それらはたぶんにお新古典派的だが、だからといって悪いものではない)によって説明するようになれば、奴隷制や日本の経営といった個々のケースを貫く一つの理論を考えることになるわけで、それは文化人類学や人文地理的比較分析を超えるものであろう。となれば、奴隷制の経済学の研究はたんに合衆国史の学徒の興味にとどまるものではなくなるし、また日本とはかかわりあいのない特殊アメリカ的な研究領域ではないともいえるのである。

参考文献

- [1] Conrad, A. H., and Meyer, J. R., "The Economics of Slavery in the Ante-Bellum South," *JPE* 66 (1958), 95-130.
- [2] David, P. A. et al., *Reckoning with Slavery*, New York, Oxford Univ. Press, 1976.

書 評

- [3] David, P. A., and Temin, P., "Explaining the Relative Efficiency of Slave Agriculture in The Antebellum South: Comment," *AER* 69 (1979), 213-8.
- [4] Easterlin, R. A., "Interregional Differences in Per Capita Income, Population and Total Income, 1840-1850," in Conference on Research in Income and Wealth, *Trends in the American Economy in the Nineteenth Century*, Princeton, Princeton Univ. Press, 1960, 73-140.
- [5] Evans, R., Jr., "The Economics of American Negro Slavery," in Universities-NBER Committee, *Aspects of Labor Economics*, Princeton, Princeton Univ. Press, 1962, 185-243.
- [6] Fogel, R. W., and Engerman, S. L., "The Relative Efficiency of Slavery," *EEH* 8 (1971), 353-67.
- [7] _____, "Explaining the Relative Efficiency of Slave Agriculture in the Antebellum South," *AER* 67 (1977), 275-96.
- [8] _____, "_____ : Reply," *AER* 70 (1980), 672-90.
- [9] Gutman, H., *Slavery and the Numbers Game*, Urbana, Univ. of Ill. Press, 1975.
- [10] Wright, G., "The Efficiency of Slavery: Another Interpretation," *AER* 69 (1979), 219-26.
- [11] Yasuba, Y., "The Profitability and Viability of Plantation Slavery in the United States," *The Economic Studies Quarterly* XII, (1962), 60-67.

西川 俊作
(商学部教授)